
revenantman

亡霊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

r e v e n a n t m a n

【Nコード】

N 1 7 8 2 M

【作者名】

亡霊

【あらすじ】

少年はある日雇い主にお前は魔法使いだと教えられる。そしてその魔法を駆使して仕事をさせていきたいという。仕事内容にはなんと殺しも含まれる。

――物騒な話ですが楽しめたら幸福です

S t a r t (前書き)

こんにちわ。亡霊です。

此処には初投稿ですがよろしくおねがいします。

指摘がありましたら是非お願いします

S t a r t

- - - - - また失敗か・・・

白い部屋。消毒臭い匂い。周りを観察して状況を把握した。

「・・・・・・・・」

- - - - - 人生12回目の自殺、あれ、11回目だっ
けか。まあどっちでもいいや。

此処は多分診療所、少年は全てを悟り眼を閉じた。

- - - - - 自殺失敗・・・今回は趣向を変えて飛び降
りを興じてみたのに・・・

少年は自分の体の強さと運の良さに舌打ちした。

確かに三階から落ちたはず。こんなことばかりだ。

確かに確実に死ぬことをやったはずなのに、死ねない。

脈だって切ったし、海にも落ちた、ガス全般も試した。

伯父が言うには「奇跡」らしい。

「・・・・・・・・奇跡ってなによ奇跡って・・・・俺は死にたいだけだ。全国でも流行っているだろう？」

内心いじけているとドアが開く。

「目覚めたか。全く、飽きないねえ、お前も。」

見た目40代前半の男が入ってくる。このヤブ医者少年の伯父だった。

この男は医師免許を持っておらず、この元診療所で暮らしている。

診療所は医者跡継ぎがいなくなって潰れたときにこの男が買い取っただけ。

なかなか凄い話だろ。これが男の口癖。

「気分はどうだ」

重ねて質問してくる男がこっちの顔色を伺う。

「いつもと同じです。あと少し眠いかも」

この答えは何度目だったか・・・体を確認してみる、とりあえず痛いところはない。頭から落ちたのに・・・

少年は死にたかった。甘えるな・・・といつも言われる。死は甘えだ。と怒られる。

いいじゃないか。甘えて甘えて楽になりたい。これが少年の本心。

もういやだ。もう辛いのは嫌だ。

少年にはコンプレックスがある。顔の痣である。黒い痣が頬に斜めに入っている。結構大きい。

遠くから見ると頬に文字を刷れてるみたいだ。これでよく苛められている。少年へのいじめは尋常では無かった。

実際、死にそうになったことも少々あった。

少年は酷く落ち込み自殺に走った。まあ自殺理由の王道である。

だが10回以上も自殺した自分も凄いとも思っていた。全てがどうでもよくなると価値観がずれてきたいた。

だが苛めは引越せばなくなる。そう思っていた。

引越して大人の世界に入れば、この痣や自分を理解できる人がいるはず・・・

それにもうすこしでは学校にいかなくてよくなる。3年目の中学もあと2週間で終わり。中卒しようと決意していた。

もう自殺もする必要はないな。少年は思った。

だが問題は金だ。金がなければ引越しもできない。伯父はどうせ出してくれないだろう。

金はどうしようか・・・と考えていると伯父が唐突に

「ああ、実はね、お前の仕事の雇い主が来ているんだ。どうせお前引き籠るだろ？少しは稼いで親孝行しろ」

少年の肉親は伯父だけである。父や母は少年が3歳ぐらいのとき事故で死んだとかいう話。

それに稼いだ金を伯父に送るつもりはない。それに伯父は金を大量にもっている。

なぜかは知らないが胡散臭い話だろう。銀行強盗とか2、3回したんじゃないかと思うぐらい持っている。

そのくせ生活最小限しか銀行から下ろさない。全く意味不明だ

「学力、運動神経ZEROの俺を雇うんですか？ことわつとした方がいいと思いますよ」

「そんなもん、しつとるわ。ただ、お前の武勇伝を聞いて是非雇いたいと言われたものでな。」

話をしに今来ているが少し話してみる。」

武勇伝とは自殺のことだろう。全く笑えないけど

「その人・・・知り合いですか・・・？」

甥っ子の込み入った事情をべらべら喋るとはさぞ、仲がいいんですよね。とか言いたいことは飲み込んだ。

「んー、友達の知り合いの知り合いの人。まあ待ってろ、今連れてくる」

「え！？今ですか！？」

目覚めて5分も立っていないのに仕事の雇い主とまともな話なんてできるわけじゃないじゃないか

男は無視して部屋から出て行った。

これは酷い・・・と少年は思った、というかどんな仕事かも聞いてない。

色々な思考を張り巡らせているうちに一人の女性が入ってきた。

20代前半に見える。質素な白い服を着ていて綺麗な顔立ちだ。

女性は何も言わず少年に近寄って行った。すると少年の顎に手を添えて自分の顔と少年の顔を近づける。

「！？」

「なるほど、なるほど。間違えないようね・・・」

少年の頬の痣を観察して出した独り言らしい。全く意味がわからな

い。

頬を見られるのは慣れている。だがここまで近づかれると流石に気持ち悪い。

「あ……の……」

「……あ……ああ、ごめんごめん。失礼だったね。」

改めて見ると綺麗な人だな。内心ドキドキしながら少年は思った。

「あの……僕を雇うって……?」

「うん。もう採用は決まったわよ。といっても社員は私と貴方だけだね。」

わけがわからない。何だこの人。社員は二人? 一体どんな仕事なんだ。

「どういう……ことですか……?」

「えっとねえ、私、この前会社立ち上げたの。仕事内容は……まあ言うなれば

“なんでも屋”。貴方には私の助手をしてもらっわ」

「助手……ですか……?」

「うん。助手」

「あの……なんで僕なんですか……? はつきり言って僕より適

任な人はゴマンといますよ」

「・・・？・・・貴方より適任な人なんてそういないわよ。・・・あ、そっか、自覚ないんだもんね」

そりゃそうだ、と勝手に納得している彼女を見る。

少年が首をかしげていると彼女はとんでもないことを言った。

「さっき確認したから間違えないけど 神藤 生 貴方は召還装甲師・・・まあわかりやすく言うと、魔法使いよ。」

ここからだ。なにかがおかしくなったのは。

S t a r t (後書き)

続きが気になってくれたらレスしてくれると嬉しいな。

Wizards rule (前書き)

ご指摘大歓迎！

Wizard's rule

「わかったら早速、会社に行くわよ」

全部一通りほぼ一方的に2時間程度夢みtain話をされた後に彼女は立ちあがった。

なんでも俺は俗世でいう魔法使いの端くれらしい。

そもそも魔法なんてないだろ。とかそんな質問は愚問らしい。現に彼女も魔法使いらしく、

目の前で炎を出したり物を曲げたり超能力かと思うぐらいの奇妙な体験をしたあとからでは何も言えない。

あと魔法使いにも色々な区別があるらしい。区別するのはどんな魔法が得意か得意じゃないってことらしい。

例えば彼女は物を燃やすことが得意な部類らしい。

ちなみに俺は物を出現・召還することに長けている部類らしい。なんでもこの部類は特別らしい。

世界に10人ぐらいしかいないそうだ。というのは出現・召還はなりたくてなれる部類ではないらしい。

なんというか・・・生まれ持った才能らしい。

まあ、なんにもしたことないけど。そこんこはまだおいといてい

いらしい。

というかまだベットのう上だ。今はいけないと意志を伝えると

「じゃあ、卒業式の日を迎えに来るからね。」

やっと眠れる・・・と思ったら

後にこんな疑問が生まれてきた。

「・・・あの・・・」

「ん？なあに？」

「魔法使えるんなら尚更、助手なんて存在いらんじやないですか？」

「あー、それね。それについてはね。実は仕事の内容に“異端の処理”って内容もあるのよ」

「いたんのしより？」

「あのねえ、魔法っていうのは凄い強い力なの。それを人間如きの器から発するのは本当は精神的にきついことなのよ。」

それで強すぎる魔法の力・・・魔力っていうんだけど、それに精神をのつとられてしまう人が出てくるのよ。」

「・・・意味わかんねえ・・・」

「それで乗っ取られた人のことを魔法使いの間では総称して“異端

”と言うのよ。」

「……んー、それで乗っ取られた人はどうなるんですか？」

「精神が破壊され自我が消滅。乗っ取った魔力にもよるけどほとんどが破壊衝動か殺人衝動を起こして

大変なことになるわ。だからそうなる前に異端を殺すの。」

この仕事、給料高いのよねー なんて血なまぐさい事を呟く彼女に鳥肌が立った。

「それ……って……でも……でも殺すなんてあんまりじゃないですか。助ける方法はないんですか？」

「ない訳じゃないけど……でも凄く手間がかかるの。それに自業自得よ。」

乗っ取る自我を持つほどの魔力は禁忌の一つなの。その魔力を手懐ければ大したものだけど、ほとんどは飲み込まれるわ。

だから禁忌は重罪なの。すごくすごく危険だから。だから貴方も禁忌には手を出しちゃ駄目よ？

私が貴方を殺すことになるんだからね。」

「……はあ……」

なんだかすごく胸糞が悪い。話の内容が凄く理解できないからだ。

そしてイライラしながら話を本題に戻した。

「それで……なんでその異端処理になんで俺なんかが必要なんですか……話を聞く限り殺し合いでしょう？」

ならますます俺がいらないじゃないですか。」

「ああ、だから貴方は出現・召還の魔法を使えるでしょう？それで凄くね・・・うん、貴方の言葉を使うなら殺し合い向きなのよ。貴方の魔法」

それにね、と彼女が続ける。

「私は分け合って今、人を殺すほどの大技が使えないのよねー。本気出せたらこの島国なんてすぐ沈められるんだけど」

後半は意味不明だが前半で少し話の内容がわかった。つまり

「・・・今は全力が出ないのでかわりに貴方に戦ってもらおう。・・・そういうことですか？」

「うん。まあまとめるとそんな感じね。」

しれっと。彼女は言った。

駄目だ・・・この人何も分かってない。

「あのう・・・少し勘違いしてると思うんですけど・・・僕、運動とか全然だめでましてや戦うなんて

できるわけじゃないんですか。そこんどこわかってください。

喧嘩なら一年の苛められっ子にも負ける自信あります。」

「だーかーらー、言ったじゃない。貴方の魔法は戦闘向きなの。・・・あー、良いわ。じゃあ今証明すればいいじゃない」

「証明？」

「出現はまだ無理だし・・・召還よ。貴方の痣はね、特殊な文字になっているの。その文字に書かれているのは召還物の名前。」

つまり貴方が召還できる物の名前よ。でもなんて書いてあるかは私にはわからない。

それに召還物は虫かもしれないし植物かもしれない。何が召還できるか。そこんとはよくわかってないんだけど。」

あー、もうヤケクソだ。言っとうりにしてみるか

「んで、どうやって召還するんですかね。」

「貴方はこれからあなた専用の“穴”と呼ばれるところに行つてもらうわ。そこにその召還物が眠っているから起こしてきなさい。」

起こし方は何でもいいわ。ぶったたくなり蹴飛ばしたり、とにかく文字通り寝ているから起こしなさいよ」

「それで・・・穴はどこにあるんですかね」

「貴方の心の中よ。」

「ハア？」

「だから、貴方の心の中。入り方は簡単よ。今から言う言葉を唱えて眼を閉じるのよ。そうするだけで行けるわ」

なんかすげえ魔法っぽくなってきて恥ずかしくなってきた。

「言葉はねえ・・・うーん、日本版でいいかなあ・・・まあいいや。」

」

そういつて彼女は紙とペンを取り出した。なかなか準備がいい。

「言葉はね。口で言える物じゃないの。というと言葉は一人ひとり違うから」

紙に書いたのは四角の箱のような図。その図の上になにやら怪しい英語みたいな文字が並んでいる

「この中に字を一文入れれるわよ。どんな字にする？直感で答えなさい」

「え？」

「だから文字。漢字ひと文字だけよ。直感で思い浮かべなさい」

わけわかんないな……。直感か……。うーん

「枉」

「え？なに？」

「え……。自分でもわからない……。何だ今の……。その図をみてたら勝手に口が動いた！意味分かんない！！」

「うん。それね。それを思い浮かべて眼お閉じてイメージしなさい」
言われたとおりに眼を閉じる

「30秒後眼を開きなさい。それまでずっとその字をイメージすること。」

言われたとおりにする。それにしても見たこと無い漢字が勝手に浮かんでくるなんて・・・

読み方も意味もわからないけどそれをずっとイメージしてみた・・・

そろそろ・・・たったかな・・・？ !!!???

「!!!!???

周りの気温が下がったような感覚。体中が溶けるような感覚。

明らかに診療所じゃない。だって・・・決定的に何が違う。

眼を開けるのが怖い。でも・・・眼を開いた。

俺は個室にいた。周りは黒い。天井も床も。

その部屋の真ん中に・・・ドロドロしたぐちよぐちよの液体のような物が山状になって蠢いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1782m/>

revenantman

2010年10月9日04時43分発行